

お盆とお施餓鬼

民俗行事のお盆が来ます。特に旧盆の八月十五日前後は仏教徒であることの如何にかかわらず、多くの人がふるさとをたずね、大移動となります。超満員の乗り物、延々と続く自動車の大渋滞もなんのその、故郷を訪ね、先祖を思う、麗しい情景です。

お盆は、目連尊者が餓鬼道で苦しんでいるお母さまを救うことから始まりました。

施餓鬼法要は、阿難尊者が短命を免れるために行ったことから始まりました。

ともに餓鬼を供養することによって救われました。それは、かつて他人に対して無慈悲なこと、意地悪なことを行なったので、死後、その世界に落ちて身も心も責められているのです。

よくよく自分を反省してみると、うっかりすると今の自分もこの様な状態に陥ることがあるのではないのでしょうか。人に意地悪をする。人を裏切る。人に嘘をつく。そして人を苦しめるとともに、自分も苦しむ。何か欲しいと思つて手に入れたけれども、それが災いのもととなってしまった。もつともつと欲しいと、欲望をふくらませて、取り返しのつかないことになってしまった。そしていつ懲らしめられるかとビクビクしている。餓鬼と同じことが思い当たることはありませんか。このような自分の心と、同じように苦しむ多くの餓鬼を救うために施餓鬼を行うのです。「施」というように、施しを行うのです。施しには、物やお金を施す財施、仏様の教えを施す法施、安心を与える無畏施があります。施餓鬼法要では、まず食べ物をお供えし、お寺に財物をお供えします。これが財施です。法要でお経をお供えし、法話もあります。これが法施です。法要の中で、これらを施すとともに、仏様にお出でいたいただいて、餓鬼に安心を与えます。これが無畏施です。

施餓鬼壇にお出でいただく仏様は慈悲の五如来です。まず、無慈悲なこと、意地悪なことをして苦しむ心をお救いください。また、**過去宝勝如来**さまです。み名の通り過去の罪業を清めてください。どのような極悪人でも、一つか二つはやさしい気持ちを持ったことがあるでしょう。

醜い姿を美しくして下さるのは、**妙色身如来**さまです。心が美しくなると同じ姿でありながら光り輝いてきます。食べ物や炎とならずにおいしく頂けるようにしてください。それが、**甘露王如来**さまです。ががつせず、感謝を以て頂くのです。食べ物はお米も野菜も命あるものです。その命を私たちはいただいています。

通らない喉を広げてくださるのは、**広博身如来**さまです。心が苦しんでいると物も喉を通りません。心を広くしてください。す。おらかな心、人を救済する心は自分をも心豊かな思いに満たされます。

そして恐れることがなにもないようになさるの、**離怖畏如来**さまです。自分の幸せのみに中心をおいて、餓鬼になります。慈悲を根本にして人の幸せに中心をおいて日々の生活をしていけば、恐れるものは何もありません。お施餓鬼の法要にはこれらの仏様に供養して、餓鬼を救って頂くのです。ご先祖さまも私たちも含めて、餓鬼を救って頂くのです。



仏壇の飾り例

えの毎日をおくっている人たちに慈悲の気持ちを捧げましょう。

お盆の期間は、入りの日が十三日、明けの日が十六日です。すから、四日間です。大体、前の日の十二日に仏壇をきれいに掃除し、お位牌も拭いて花をとるかえ、「精霊棚」をつくり、昔は竹を四方にめぐらしたりして手の込んだものをつくりましたが、今では、お仏壇の前に小さい机を置いて白い布をかけ、そこに「まこも」を敷いてお供物などをいつもより多く供えるというようになってきました。ナスで牛をつくり、キュウリで馬をつくらせて供えるといわれています。

十三日は提灯をもってお墓参りをし、そのときお墓でロソクに火をつけて、その火を提灯にうつして消さないように持ち帰り、家の精霊棚にその灯をうつします。これで、灯と一緒に先祖の霊をお迎えしたことになるのです。先祖の霊魂が一刻も早く懐かしい家にもどれるようにと、お迎えは早い方がいいといわれています。

また夜に帰ってくるかも知れない仏さまのために、十三日の夕方には門口でオカラをたいて、あなたの家はここですよと教えてお迎えしますが、それが迎え火です。

十六日（土地によっては十五日）は送り火といって、ご先祖さま、仏さまを送る日です。このときは、家の精霊棚のロソクの火を提灯にうつして、消さないようにお墓まで持って行き、お墓参りをしてから灯を消します。ご先祖の霊を再び霊の世界に送りかえす、という気持ちからはじまったのが送り火の行事です。

お盆は、先に逝かれた亡き人々やご先祖さまと、心を通い合わせる大切な行事です。こまやかな心くばりで迎えたいものです。

お盆の準備



新盆のおたくへ

■亡くなった方を、初めて迎えるお盆のことを「新盆」とか「初盆」といって、特にいていねいに供養を営みます。

■「盆供養」とは、先祖の霊を、年一回あの世からお迎えして供養することです。すから、七七日忌（四十九日）を過ぎてから初めて迎えるお盆が、ほんとうの意味での「新盆」となります。つまり、亡くなった日が六月末などで、七七日忌（四十九日）を終えていない新盆の場合は、翌年を待つて初盆とするのが普通です。

■新盆には、決まったお供え物のほかに、故人の好物などができるだけたくさん供えます。■新盆のちようちは、白一色のものを用います。